

報告

第 5 回ジョイント連続セミナーの報告(令和 3 年度)

大村知子^{1,2)}, 横手直美^{1,2)}

¹⁾中部大学生命健康科学部保健看護学科 ²⁾生命健康科学研究所保健看護領域部門

I. はじめに

中部大学生命健康科学研究所保健看護領域部門では、大学院生、教員、学部学生、地域の看護職、医療職などの研究力向上をめざして、毎年、ジョイント連続セミナーを企画・開催している。5 回目となる今回のセミナーでは、「保健医療領域における性的マイノリティの現状と課題～疫学研究の結果から～」と題し、医療従事者として、教員として、これから医療従事者になる学生として知っておくべき性的マイノリティと医療について学ぶ機会とした。

性的指向・性自認の多様性については社会的関心が高まり、新聞やテレビでも取り上げる機会が増えた一方で、マスメディアで語られるほど言葉だけが独り歩きをし、その本質を理解しないままであるように感じる。人口の 5～3%とされる性的マイノリティのメンタルヘルスの問題や ¹⁾、性的マイノリティ当事者が医療施設を受診することへの様々な困難や課題があることが指摘されており ²⁾、性的マイノリティの方たちが安心して医療を受けられるよう、性の多様性への正しい理解と知識を深めていくことが求められる。そこで今回のセミナーでは、①性的マイノリティの方々が医療を受けるにあたって抱えている問題は？②性的マイノリティについて臨床で研究を行うにあたって留意すべきことは何か？という視点で、この分野に造詣の深い日高庸晴氏に講演していただくことをお願いした。

II. セミナーの概要

1. 日程:2022 年 2 月 12 日(土)14 時～16 時
2. 開催方法:Zoom ウェビナーによるオンライン開催
3. テーマ:保健医療領域における性的マイノリティの

現状と課題～疫学研究の結果から～

4. 講師:宝塚大学看護学部教授 日高庸晴氏

5. 参加者:128 名。内訳は、一般参加者 9 名(本学臨地実習施設関係者および近隣の医療福祉施設職員)、学内教員 32 名、学生 87 名(院生含む)。



講師 日高庸晴氏

6. 講演内容(要約)

- 1) 問題を可視化する意義と接触困難層を対象とした研究方法

日高氏はエイズ予防に関する大規模な疫学研究を発端に計量調査を得意とし、性的マイノリティの人々が抱える問題を明らかにしてきた。その経験から「存在が可視化されないことによる不利益は、当事者だけが背負わざるを得ず、その損失は救済されることがなく悪循環を繰り返すだけである」と述べ、大規模調査を継続的に実施し、エビデンスの蓄積を図ることの重要性を強調された。

計量調査の強みは、目に見えにくい問題を数字にして現状を示し、問題を顕在化することによって、法改正までは難しくとも、ガイドラインや指針、各省庁からの通知につなげるといった施策に反映させることができることである。大学院生や教員に対しては、研究成果を国内外の専門雑誌上で発表することは大切だ

が、一般市民に分かりやすく公表していくことも重要であると激励のメッセージがあった。

性的マイノリティ以外にも希少疾患患者のようなサンプリングが難しい集団は、接触困難層 (Hard to reach population/Hidden population) と呼ばれる。2000 年頃から社会調査におけるインターネットの利用が増加しており、インターネット利用の利点として、調査費用が安い、調査日数が少ない、メールアドレスを収集することによって経時的に反復した調査が容易である、匿名性の確保が容易である、居住地域や回答時間に左右されない等があり、接触困難層へのアプローチに適している。一方で、参加者がインターネット利用者に限定される、標本のランダム抽出は不可能である等の欠点もあることを踏まえて活用すべきであると述べた。

2) 性的マイノリティの人々の現状

性の要素を分解して考えてみると、身体の性別、性自認、社会的な性、性的指向、法的な性別の 5 つに大別することもできる。LGBT (L: Lesbian, G: Gay, B: Bisexual, T: Transgender) の LGB は性的指向を、T は性自認のマイノリティであることを表しており、その人口規模は 5~8%と推定されている。6色の「レインボーフラッグ」は LGBT のプライド(尊厳)と社会運動の象徴として知られている。

「性的指向と性自認」に関連した国の動きは、2015 年の文部科学省による「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」³⁾以降、主に性同一性障害への理解と対応に関する啓発が進んできた。2020 年、厚生労働省により労働施策総合推進法(いわゆるパワハラ法)が一部改正され、性的マイノリティの人に対するアウティング(本人の了解を得ずに、勝手に第三者に本人の性的指向や性自認を暴露する行為)⁴⁾が初めてパワハラとして認定されたことは画期的進歩である。

3) 医療現場における課題

看護においては、日本看護協会、日本助産師会が人間としての尊厳と権利の尊重として性的指向と性自認を倫理綱領によって保障している^{5,6)}。また、

厚生労働省の「医療・介護関係者における個人情報 の適切な取り扱いのためのガイドランス」⁷⁾では、家族を法的な意味での親族関係のみを意味せず、現実 に患者(利用者)の世話をしている親族及びこれに準 ずる者としている。つまり、性的マイノリティの人々も 等しく医療を受ける権利があり、婚姻関係にないパー トナーの病状や治療方針等、医療に関する情報を知る 権利がある。

しかしながら、実際の医療現場ではこのことが周知 されているとは言えない。とくに、トランスジェンダーに おいて、医療機関に行くことを我慢した経験がある割 合は高く、10 代以降の各年齢層において、約 3~5 割であった。医療者から発せられる一言で傷ついた 経験をする者も多く、「その質問は何のために、本当 に必要な質問か?」と医療者自らが考え直すことも必 要であると指摘された。こうした医療における問題に 対して、性的マイノリティの人々が安心して医療機関 を受診することができるような医療環境が必要であり、 LGBT 啓発を兼ねてレインボーフラッグをホームページに掲げたり、受付や問診時、入院時、手術の同意 書、診察券、病室の配置やトイレ、病衣など、具体的 な対応例が紹介された。

4) 教育現場における課題

LGBT 学生にも支援が必要である。性的指向、性 自認、性別表現に基づくハラスメントを容認しないた めに、学則などの学内規定に明文化することが急務 の課題である。

大学では学生相談室・相談窓口の設置のほか、ト ランスジェンダー学生への配慮として、誰でも利用で きる多目的トイレや更衣室など物理的な配慮、学籍 簿、在学証明書、教員免許取得見込証明書といった 種々の書式の性別表記方法も検討する必要性があ ると指摘された。

看護師国家試験出題基準平成 30 年版⁸⁾では、そ れまでの精神看護学における「性同一性障害」に加 え、母性看護学でも性の多様性として「LGBT」が小 項目として追加された。しかし、看護学生のみならず、 全学生に対する教育が必要であり、ヒューマンセクシ

ヤリティ、セクシュアリティと人権、ダイバーシティ等の観点から学際的なカリキュラムを組むことを提案された。また、FD/SD 研修として、教職員の言葉遣い、当事者学生への配慮、対応方法についてプログラムを組むことも有効である。

さらには、氏による2019年の1万人以上のLGBTの人を対象とした調査から、トランスジェンダーは周囲との違和感に10～11歳で気づいていたことが明らかとなった。また、同氏による2016年の1万5千人規模のLGBT当事者の全国調査では⁹⁾、いじめ被害の経験はLGBT全体で60%前後認められ、71%の当事者が職場や学校で差別的な発言を聞いていた。

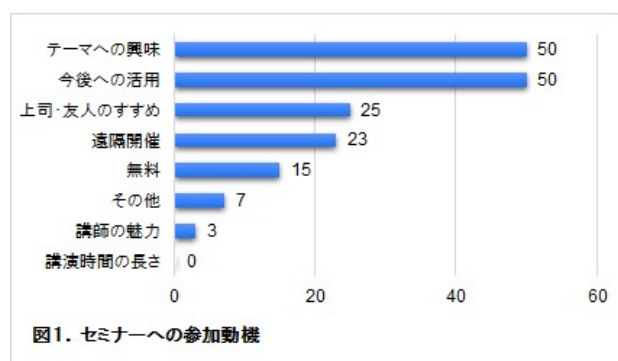
こうした被害の背景には、性的マイノリティの人々が存在を無視されがちで、逆に注目されるとアウティング被害に遭うなど、自尊感情をひどく傷つけられ、人権侵害にあっている現状がある。したがって、思春期早期から性的マイノリティに関する教育が全員に必要であることが強調された。

Ⅲ. 参加者の反応

セミナー終了後、任意で無記名のアンケート調査を実施し、99名（回収率は77.3%）から回答が得られた。

1. 参加動機

参加動機は以下の通りで、50名（50.5%）が「テーマへの興味」「今後への活用」であった（図1）。



2. 講演内容の理解度

講演内容の理解度は全員が「理解できた」「やや理解できた」と回答し、属性別においては、一般参加と教員は「理解できた」が28名（87.5%）、学部学生は69名（61.2%）であった（図2）。

3. 満足度と感想

セミナーの満足度と今後に役立つかの設問では、「満足」が80名（80.8%）、「役立つ」が79名（79.8%）と、セミナーへの高評価を得ることができた（図3、4）。

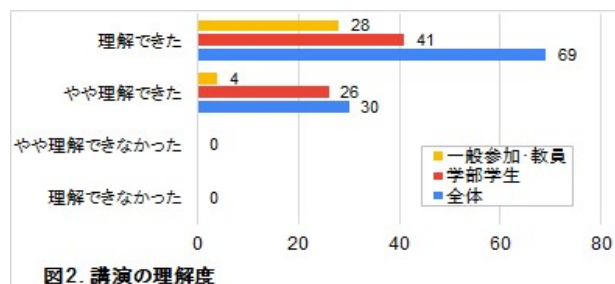


図4. 今度に役立つか

棒グラフで役立つかどうかとその人数を示す。

役立つかどうか	人数
役立つ	79
やや役立つ	20
あまり役立つ	0
役立たない	0

セミナーへの意見・感想は、33名から自由記述の回答があった。以下に抜粋する。

〈看護職〉

- ・ 医療者としてどのように対応していくのか、職場内にもLGBTsの方がいるかもしれないと考え、さらに学んでいく必要があると思います。これからもLGBTs関連のセミナーを開催していただきたい。

〈教員〉

- ・ LGBTsの方の生きづらさを数値で知り、衝撃的でした。質疑応答時のご回答で、性自認が流動的であることも初めて知りました。「子どもがLGBTsと言ってきたらどうしよう」と思っている親御さんは多いと思うので、社会全体に周知していけるといいと思いました。
- ・ 豊富なデータをもとに現状と課題を説明していただき大変理解できました。今後の取組みを考えていかなければいけないと思います。
- ・ 自分も知らないうちに学生を傷つけているのではないかと思います。とても興味深く聞かせていただきました。
- ・ 「可視化されにくいと不利益は当事者当にだけ背負わされる」という講演内容が印象的でした。LGBTsに限らず、可視化されにくい現実に対し個人として

医療職としてできることを考え行動したいと思いました。

- ・ マイノリティという考え方に、既に偏見があるのではと感じました。それぞれの個性や特性は、対象の数ではないように感じています。

〈学部生〉

- ・ LGBTs について学習する機会は少なかつたため、とても学びになった。学ぶ機会が増え、個人が尊重される世の中になっていくといいなと思いながらセミナーを聞いていました。
- ・ 日本では、皆と同じを好み、それが当たり前と考える傾向があるように思うので、まずその考え方から見直さなければならぬと感じました。
- ・ 具体例を挙げた説明でとても分かりやすく、より身近な問題として捉えることができた。
- ・ 日本は海外に比べて性的マイノリティへの理解度が低いと感じます。少しでも、差別や偏見が無くなるよう、自分ができる発言をしていきたいと思いました。
- ・ LGBTs について、周囲の人と考えを共有し様々な考え方を知っていくことで変化して行くのではないかと思います。看護師になる身として病院内での関わり方を学ぶことができとても勉強になりました。
- ・ 多様性の社会の中で看護師を目指す立場にある自分自身の価値観や偏見を見直す機会となりました。

IV. おわりに

本セミナーは、性的マイノリティの方々が医療を受けるにあたってどのような困難を抱えているのだろうか、医療者として何が求められるのかということを学びたいと、日高庸晴氏に講師依頼をし、快くお引受けいただいた。性的マイノリティの方々が社会の中で抱える問題を可視化し問題を顕在化させるための研究手法や、国内外の取り組みの動向、LGBT を取り囲む医療環境、子どもたちのメンタルヘルスの問題と教育での課題など、氏のこれまでの研究で裏付けされた成果を踏まえて、実に多岐にわたる視点から問題提起をいただいたことに心から感謝します。

氏の講演を拝聴し、自身の社会的性別（ジェンダ

ー）への偏見はないであろうか、偏見を正当化したことや、日常や教育・看護実践の場面において不用意な言葉を使ったことがなかっただろうかと振り返る機会となった。そして、看護教員として、大学組織の一員として、性的マイノリティへの関心を高め、教育改善につなげていきたいと気持ちを新たにしました。

最後に、本セミナーにご参加いただきました皆様、企画・運営に際しご尽力いただきました関係の皆様へ厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 松本洋輔(2021)特集:LGBTのメンタルヘルス セクシュアルマイノリティとメンタルヘルス, 心身医学, 61 巻7号, 599-607.
- 2) 江口珠美(2021)【医療スタッフが知っておきたい性的マイノリティと医療】性的マイノリティ当事者が受診を躊躇しない外来づくり, 医学のあゆみ, 279 巻4号, 278-282.
- 3) 文部科学省(2015)性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について,
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm (2022年2月21日アクセス)
- 4) LGBTと“アウティング”(2018)NHK 福祉情報サイトハートネット, <https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/28/> (2022年2月21日アクセス)
- 5) 日本看護協会(2021)看護職の倫理綱領,
https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code_of_ethics.pdf (2022年2月21日アクセス)
- 6) 日本助産学会. 助産師の声明・綱領,
<https://www.midwife.or.jp/midwife/statement.html> (2022年2月21日アクセス)
- 7) 厚生労働省(2017)医療・介護関係者における個人情報適切な取り扱いのためのガイダンス,
<https://www.mhlw.go.jp/content/000681800.pdf> (2022年2月21日アクセス)
- 8) 厚生労働省(2017)「看護師国家試験出題基準平成30年版」について,
<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10803000>

[-Iseikyoku-Ijika/0000158947.pdf](https://www.nits.go.jp/materials/intramural/files/087001.pdf)（2022年2月21日アクセス）

9) 日高庸晴(2016)LGBT当事者の意識調査, 独立行政法人教職員支援機構「学校で配慮と支援が必要なLGBTsの子どもたち」,

<https://www.nits.go.jp/materials/intramural/files/087001.pdf>（2022年2月21日アクセス）

【講師紹介】

日高庸晴氏

現職: 宝塚大学看護学部 教授

略歴: 京都大学大学院医学研究科で博士号(社会健康医学)を取得。カリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部エイズ予防研究センター研究員、公益財団法人エイズ予防財団リサーチレジデントなどを経て、現職。

社会活動: 法務省企画の人権啓発映像や、文部科学省が2016年4月に発表した性的指向と性自認に関する教職員向け資料の作成協力、文部科学省・厚生労働省・法務省・人事院・警察庁や自治体の研修講師など、幅広くご活躍されている。監修したDVD教材「LGBTsの子どもの命を守る学校の取組 当事者に寄り添うために～教育現場での落とし穴」は文部科学省特選を受賞。

著書: もっと知りたい! 話したい! セクシュアルマイノリティ—ありのままのきみがいい全3巻〈1〉セクシュアルマイノリティについて、〈2〉わたしの気持ち、みんなの気持ち、〈3〉未来に向かって(汐文社, 2015, 2016)。

企画・運営

2022年度生命健康科学研究所の助成金を受けて実施した。

[企画委員] 城憲秀, 堀井直子, 小松万喜子, 渋谷菜穂子, 白石知子, 牧野典子, 大村知子, 横手直美

[運営委員] 石井真, 山下恵, 清水いつみ, 堀田清司, 岡倉実咲, 中山知未

Title: Report of the 5th Joint Seminar of the Division of Nursing 2022.

Author(s): Tomoko Omura^{1,2)}, Naomi Yokote^{1,2)}

Address(es): ¹⁾Department of Nursing, College of Life and Health Sciences, and ²⁾Institute of Life and Health Sciences, Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan

Keywords: Joint seminar, Sexual minorities, Health disparities